



龍

の

愛に

溺れて

氷高

illustration

池田

園子

ソウコ



龍の愛に溺れて

《立読み版》

氷高 園子

イラスト 池田 ソウコ

蔦の絡んだ意匠の、大きな錬鉄の門が開かれる。

ぎい、とかすかな音を立てて開いたそこから出てきたのは、紺のデイバッグを片肩にかけた青年だ。黒地に青の模様が入ったシャツに、ダメージジーンズ。軽く茶色に染めた髪に中肉中背の彼は、そんな重々しい扉から出てくるには似つかわしくない、どこにでもいるような普通の青年だった。

彼を見つめる者があれば、彼がその右足をわずかに引きずることに気がついただろう。それはよく見なければわからない程度の、ほんのわずかな彼の瑕だ。

足を引きずるハンデなど思わせない姿勢で足早に門を抜ける彼に、黒いスーツの男たちがびしりと背を正し、勢いよく頭を下げる。しかし青年は、そんな男たちの存在などないかのようにまっすぐ前を向いて門を出る。頭を下げる男たちも、そんなどこか尊大な青年の態度など当たり前前だというように会釈を崩さない。

見たところどこにでもいるような風貌の彼が、ほかの者たちとどこか違うところがあれば、そうやって自分より十もまだ年上の男たちに頭を下げられて、動じたふうもないことだろう。その仕草ひとつ

にも、彼が普通の青年ではない、何か『違う』ところ——生い立ちや背景——があるということを思わせる。

彼の向かう先には黒塗りのBMWがあつて、後部座席のドアを開けて待つている男がいた。

黒髪をきれいに撫でつけた彼は黒地にストライプ柄のスーツ姿で立っている。歩いてきた青年に、ほかの者と同じく会釈をした。青年は、彼だけはちらりと見上げて、声はかけないものの目だけで頷く仕草を見せる。

青年は、BMWの後部座席に座った。丁寧に扉が閉じられる。

シャツ姿の男は運転席に座った。バックミラーで青年を見やり、一言問うた。

「まっすぐ行かれますか」

「うん」

それだけの会話で、車は走り出す。発車したと感させないなめらかな振動に包まれた車内で、青年は低く息をついた。深く、革張りの座席に身を埋める。

葛の絡まった鍊鉄の門は、広域指定暴力団・亢竜会（こうりゅうかい）の傘下、一ノ瀬組組長の本宅（いちのせ）のものだ。ダイバツグを肩にかけて出てきた青年は、その組長のひとり息子、一ノ瀬暁（あきい）。私立向陵大学（りやうりやう）の二年生で、専攻は現代経済学だ。

運転しているのは、一ノ瀬組の組員である近衛徹司。今年三十二歳になるといふ彼の年齢を暁がはつきりと覚えているのは、自分とちょうど一回り違うからだ。近衛は暁が幼いころから一ノ瀬組にいて、そのころは内働きとして本宅内外の雑用をこなしていた。

そして近衛は、この年でもやはり内働きとして一ノ瀬組にいる。同じくらいの歳の組員が準幹部に幹部、中には若頭補佐にまで出世している者があるのに、近衛は立番も同様の内働き。しかし近衛自身はそれを不満に思っているようではなく——暁のほうが、そのことをよほど不満に感じている。

ちらりと顔をあげる。バックミラーに映った近衛の顔は、外仕事も多いのにそう焼けてもいない。涼しげな眉とややつり上がった目。鏡には映らないが通った鼻梁と、薄い唇。

留守がちな両親よりもよほど顔を合わせる機会の多い近衛の顔は、鏡を見るまでもなく暁の脳裏に刷り込まれている。それでも暁は、彼を見た。彼が運転に集中して暁の視線に気がついていないのいいことに、ずっと彼を見つめていた。

三十分ほどで、車は停まった。学校の駐車場にはすでにたくさん車の車が停まっている。ランサーエボリューションX、セダンにフェアレディZ、ポルシェにベンツにBMW。

音もなく駐車した車から、近衛がすべるように降り立つ。足早に後部座席に向かい、暁の横の扉が開く。暁はデイバッグを抱え、車から降りた。

「あ、っ」

降りるとき少しだけバランスを崩した暁が、小さな声をあげた。素早く近衛の手が伸びてきて、暁を支える。

「……、っ……」

胸の前に右腕が、腰には左腕が。後ろから回されて引き寄せられる。近衛の腕の中に抱きとめられた。

背に伝わる、近衛の熱。スーツ越しにも油断なく鍛えられている身体の厚みが伝わってきて、暁は低く、息を呑む。

近衛の腕は強く、暁は身動きもできない。わずかに不自由な暁の足をかばうにしては腕はあまりにも強く暁を引き寄せているように思えたし、彼の腕はいつまで経っても離れない。

駐車場には登校してくる学生たちの車が次々に停まり、皆が下車して来るといふのに。こうやって近

衛に抱えられたままの体勢を誰かに見られるのはあまりにも気恥ずかしく、暁は乱暴な声をあげた。

「はな、せよ」

暁は言った。近衛の手は、ぱっと離れる。まるで暁を離すことを忘れていたとでもいうようだ。離れてしまえば彼のぬくもりが、その体の厚みが惜しく、そんな自分を振り払おうと、ひとつ大きく身震いした。

「そんな心配しなくても、大丈夫だ。転んだりしない」

「失礼いたしました」

近衛は、深々と頭を下げた。通りがかる学生たちが、そんなふたりを物珍しそうに見ている。いかにもな高級車で学校に乗りつけてくる学生たちは多くても、こうやって運転手がついてくること、それが真つ黒ではないにしても確かにその筋の者とわかる黒スーツをまとっていること。そんな者はほかになく、そのことに今さらながらに気がついて、暁は苛立った。

「それに、こんな……毎朝送ってこなくてもいいから」

「そういうわけにはまいりません」

近衛は、その意志を揺るがすことなど不可能だと思わせる口調で、言った。



「若は、一ノ瀬組の次期。大切な御身、少しでも危険に晒すことはいけなないと、組長からも重々に言いつかっております」

「過保護なんだよ」

暁は唇を噛む。近衛がこうやって暁の世話を焼くのは、暁の体のことを心配してか、それとも父に頼まれたから護衛を欠かさないのか。どっちだ、と思う気持ちに胸に疼き、暁はますます冷淡に声を継いだ。

「それと、若なんて言うな。こんなところで。いかにもだろうが」

筋者の子弟が多く通う学校だとはいえ、それは暗黙の了解、表向きは普通の大学なのだ。言い捨てて、暁はふいと踵を返す。今度は転ばないように両足に力を入れて、近衛に背を向けると彼の声が聞こえた。

「わ……暁さま、今日は何時で」

暁は足を止めて、しばし考える。

「三時」

「かしこまりました」

そう言って近衛は、頭を下げる。駐車場から門のほうに歩いていきながら、ちらりと近衛を振り返る

と、彼は会釈の体勢のまま。暁は勢いよく彼に背を向けると、可能な限り早足で校門に向かって歩き出した。

五限目までだと思っていた講義は、六限目までであった。駐車場に着いたときには暁の言った三時はずいぶん過ぎていて、それでも暁は、黒のBMWを捜した。

車は、駐車場の隅のほうに停まっていた。駐車場の入り口から車の停まっているところまではずいぶんと距離があるのに、遠目にもストライプの黒いスーツの男が運転席から降りてきたのがわかる。それは近衛以外にはあり得ず、彼は暁が車に近づくずいぶんと先から運転席を降り、頭を下げて暁がやってくるのを待った。

「お疲れさまです」

「……うん」

近衛は、一時間以上待たせたことなど一言も言わず、音もなく身をこなすと後部座席のドアを開ける。また朝のようなことになってはたまらない——暁はよろめいたりすることのないように体に入力して

乗り込み、だから朝のように近衛に身を抱えられることはなかった。

暁が柔らかない座席に身を埋めたことを確認すると、近衛はドアを閉める。運転席に乗り込み、エンジンをかける。

「出します」

「うん」

ふたりの会話は、いつもこの調子だ。近衛は必要最小限のことしか言わず、暁も言葉多くはない。それでも、月曜日から金曜日——ときおり授業のない日もあるが——こうやって近衛の運転する車で登校し、下校する。これは暁が小学生のころからの習慣で、暁が体調を崩したり、ときにはずる休みをしたる以外、近衛の都合でこの習慣が途切れたことはない。

「学校、いかがでしたか」

口数の少ない近衛が、必ずそうやって一日の事を尋ねる。暁は窓の外を見ながら、答える。

「別に」

小学生のころは、それでも今日は何があった、誰がどうしたと近衛に話すこともあった。しかしある時期から、暁の返事は「別に」だの「いつもどおりだ」だの、愛想のないものに変わっていった。

それでも近衛は、学校でのことを尋ねる習慣を欠かしたことはない。彼が本当に暁の学生生活を聞きたがっているのか、それとも単に習慣として口にはしているのか、暁にはわからない。もともと小学生のころならともかく、いい歳になって学校でのあれこれを話して聞かせるようなものではないだろう。

筋者の子弟が多く通うこの大学では、学内での派閥も、自然保護者のそれに倣う。一ノ瀬組の次期としては傘下となっている亢竜会の者と派閥を持つべきなのだろうが、あいにく——もしくは幸い——亢竜会関係の者は、この大学に在学していない。暁は自然ひとりであることが多く、同じ講義を取っている顔なじみと挨拶をすることくらいはあっても、コンパだの飲み会などに縁はない。朝九時に登校して、三時ごろに下校して。判で押したような生活は、まるでサラリーマンか何かのようだ、と自分でも苦笑することもある。

近衛の運転する車は、朝出ていった蔦の絡んだような錬鉄の門の前にすべり込んだ。立番の組員たちが、慌てて迎え出る。しかし近衛は、暁の座る後部座席のドアを開ける仕事を、彼らには任せない。いつも自分が手ずから開けて、いざなうように暁が降りてくるのを待つ。差し出される近衛の手を取ったことはないが、馬車から降りる姫ぎみというのはこういう気分なのかと、いつも思う。

意識して足に力を入れて、車を降りる。立番たちが開ける門をくぐって敷地に入ると、背後のBMW

音が音もなく去っていく。暁がゆっくりと庭を抜け、玄関をやはり立番の者に開けさせて入ると、裏の駐  
車場から戻ってきた近衛がキッチンの勝手口から入ってくる。

そのタイミングはいつもほぼ一緒に、走っている様子もない近衛は、いったいどんな魔法を使って自  
分と同じタイミングで家に入ってくるのだろうか、いつも不思議に思う。

「何かご用意します」

言って、近衛はキッチンに立つ。このときばかりは通いの家政婦もキッチンを追い出され、そこは近  
衛の独壇場になる。

「子供のおやつじゃないんだから……」

暁は苦笑するが、部屋に戻って荷物を置き、着替え、降りてくるときにはたいていサンドイッチだの  
スコーンだの、軽食がダイニングテーブルに並んでいる。暁が彼の出す食事を拒んだことはなかった。  
いわゆる反抗期だった、高校生のときですらそうだ。それは近衛がわざわざ用意してくれているとい  
心を嬉しく思っているせいかな、単に腹が減っているからなのか、どちらなのかを深く考えたことはない。

「組長は、今夜は児童会の会合がおありだそうですね」

今日のメニューは、クロックムッシュだった。黙々と口を動かす暁に、近衛は言った。

「奥さまは、お着物の会で遅くなられるそうです」

「そうか」

両親がいないからといって、寂しがる年でもない。そうでなくても両親は留守にしていることが多い。暁は短くそう言って、近衛の手料理を咀嚼することに集中する。

「若は、お出かけのご予定はおありですか」

「別がない」

この返事をするたびに、暁は何とはなしに虚しい気持ちにとらわれるのだが——実際、何の用もないのは事実なので、そう言うしかない。

「それでは、夕食もここで召し上がりますね」

「今食べてるから、夕食はいい」

言うのと近衛は、少し考える素振りを見せた。

「では、お夜食でも。必要なときにおっしゃってください」

ここでは通いの家政婦が三人いて、看護師よろしく三交代制で二十四時間詰めている。しかし彼女たちの存在を無視することを、近衛は平気で言う。それは、暁のことに関してのみに限られるのだけれど。

「わかった」

なおももぐもぐと口を動かしながら、暁はちらりと近衛を見上げる。近衛はどこか難しい顔をしていた。しかしそんな顔をしていても、きっと彼の頭の中は、夜食のメニューを何にするかということदैっぱいなのだ。

そう思うと、少し笑えた。残りのクロックムッシュを両手で支えながら暁は少し肩を揺らして笑い、そんな暁を、近衛は少し不思議そうな顔で見やってきた。

暁の両親、すなわち一ノ瀬組の組長と姐さんが自宅にいることは、あまりない。

百坪以上の敷地にある屋敷にいるのは暁と、近衛を始めとする立番の者たち。準幹部や幹部の者たちが出入りすることはあるが、それは主に組長がいるときに限られる。この広い家で暁はひとりであるようなものであり、組長や姐さんの耳がないとわかると、立番の者たちの口も、自然と軽くなることがあるようだ。

「近衛さんって、若頭補佐にまでなったことがあるんだろう？」

そんな声を聞いたのは、ある土曜日の夜。学校はなく、朝から暁は本を読んだりテレビを観たり、あまり人には胸を張っては言えない自堕落な一日を過ごしたあとだった。

二階にある自室から、階段を下りてきたところでそんな声が耳に入ったのだ。

そつと、階下を見下ろす。そこにいたのは組員のふたり——暁と同じくらいの年の、やつと最近組長の自宅の立番をさせてもらえるようになった若衆たちだ。

「そんな人が、どうして内働きなんかやってるんだ？」

そう言ったのは、スキンヘッドにサングラスの男だ。いかにも極道といったそんな格好を暁はあまり好かなかったが、このたび暁の意識をとらえたのは、その風体ではない。その話す内容だ。

「俺も、くわしいことは知らないけど」

彼と話しているのは、オールバックの男だ。彼もやはりサングラスをかけているのは、極道としての迫力が出るとでも思っているのか。そんな見かけ倒しの威嚇は、やはり暁の嫌うところだ。

「何でも昔、若に」

どんつ、と壁が震えた。若衆たちは、はっと顔をあげる。

「わ、若っ！」



暁が拳で壁を殴ったのだ。いくら頑丈に作られている家の基盤でも、渾身の力で殴られれば少しぐらいは揺れる。若衆たちは、自分たちが殴られたかのように直立不動になった。

目をすがめ、若衆たちを睨みつける。彼らは、自分たちが口にしてはいけない話をしていたのだという、暁の逆鱗に触れる話をしていたのだということに、やっと気がついたらしかった。

「若！ おやすみなさいませ！」

まだおやすみという時間でもない。しかし彼らはそう言ってぴしりと背を正し、空気を切る音がするほどに勢いよく会釈をした。

「ふん」

吐き捨てるように、暁は言った。水でも飲もうと階下に下りかけたのだが、その気はすっかり失せてしまった。そのまま再び部屋に戻り、建てつけが悪くなってしまうくらいに、勢いよくドアを閉める。

そのまま、一日ごろごろしていたせいで乱れたベッドに身体を横たえる。天井を見上げながら、きゅつと唇を噛んだ。

近衛徹司は、乳児院で育てられた子供だったという。しかし母親はいて、母親が近衛を迎えに来たの

は、彼が中学校を卒業するという三月だった。

今まで一度も面会に来たことのない母親が、思い出したように半ば捨てた息子を迎えに来た理由——中学校を卒業すれば、就職できるからだ。金を食うばかりの子供のころは捨て置いて、いざ金を生むことができるようになったとたんに迎えに来た。

産むだけ産んであとは施設に任せていたくせに、中学卒業の時期だけはしっかりと計算していたのだと、近衛は笑って暁に話してくれた。

そんな母親から、近衛は逃げた。逃げて下町をうろつく宿無したちをまとめ、近隣の不良連中との小競り合いを繰り返す日々の中、暁の父、一ノ瀬組の組長に拾われたというのが、暁の聞いた話だ。暁が物心ついたときには近衛はすでにこの家において、何くれと面倒を見てくれることには変わりなかった。

今の折り目正しい近衛からは想像できない、彼が街を徘徊する破落戸こころつきだったとは——視線を尖らせ肩をいからせ、まわりを威嚇しながら歩く若いころの近衛を想像すると、暁は思わず笑ってしまうのだが。

——しかし。

先ほど、若衆たちの話していたこと。確かに近衛は、一時は異例の若さで若頭補佐にまで上り詰めた。

一ノ瀬組始まって以来の出世、例のないサクセスストーリーに、当時の組員たちは皆近衛を尊敬し、妬

み、やっかんだ。

そのころ暁はまだ小学生ではあったが、暁について歩く近衛には、皆が定規で測ったような会釈をし、まるで暁まで偉くなったかのような錯覚に陥ったことを思い出す。

しかし——『ある事件』が起きた。それゆえ、近衛は出世の道を捨てた。若頭補佐の座も、その先に進むべき道も、何もかもを捨てた。

「……………」

ベッドの上で、暁は呻いた。しきりに右足を撫でる。その傷は、すっかり治っているはずなのに。なのに、疼くような気がする。あのときのように熱く激しく、体中を貫く痛みが蘇ったような気がする。

週明けの月曜日は、どんよりと曇った一日だった。朝、ちらりと観たテレビで低気圧が近づいているとか何とか、言っていたような気がする。雲は一日晴れず、曇天を見上げながら、暁は駐車場に向かって、キャンパスを歩いていった。

「一ノ瀬暁」

いきなり声をかけられて、驚いた。とつさに振り返ると、そこには五人の男たちがいる。シャツとジーンズをラフにまとった者たちだが、向陵大学の学生ではない——年齢的にも雰囲気にしても、彼らは外部から入り込んだのだと暁は直感した。

「一ノ瀬暁だな」

そうだとともそうでないとも言わず、暁は彼らを睨みつけた。暁の眼光に少し怯んだ様子を見せたものの、男たちは一歩、暁に詰め寄ってくる。

「お前が名乗れよ」

暁は、ことさらに居丈高に言った。一瞥に全員の資格好を目に収めたが、彼らの身分を示すものはない。だからこそ、彼らが誰であるか暁は感じ取った。

——同仁会か。  
どうじんかい

内心、暁は舌打ちした。同仁会とは、一ノ瀬組と縄張りが近いことからよく小競り合いになる組だ。一ノ瀬組の次期ということで、こうやって絡まれることも今までになかったわけではない。しかしここしばらく同仁会と抗争があったという話を父親に聞いてもないのに、いきなりこうやって取り囲まれる理由が、暁にはわからなかった。

「それとも、名乗るのは怖いか？ 俺にやられて、噂でも流されたら上に何て言われるかわかったもんじゃないもんな。同仁会の若衆は、五人がかりでひとりにやられましたってな」  
「なにい？」

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

龍の愛に溺れて

《立読み版》

発行日 2011年6月16日

著者名 氷高 園子

イラスト 池田 ソウコ

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Sonoko Hidaka 2011

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。